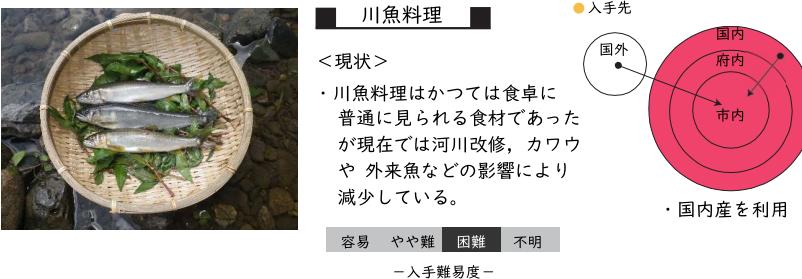


「京都らしさ」との関わり



生物資源の利用と調達状況の例



アユの分布と生態

アユは、体長約20cm、北海道西部・本州・四国・九州、朝鮮半島～ベトナム北部・台湾に分布し、川の流れが比較的緩やかで、川底が礫で覆われる河川中流域や湖沼の岩盤や礫石底の瀬や淵に生息する。背はオリーブ色を帯び、成長に伴い体側前部に大きな黄色い斑紋が現れる。形、香、味、生息環境、独特の漁法などの点で申し分のない日本の代表的名魚。独特的風味があり塩焼きにして極めて美味、フライ、魚田、すし、うるかなどにもする。



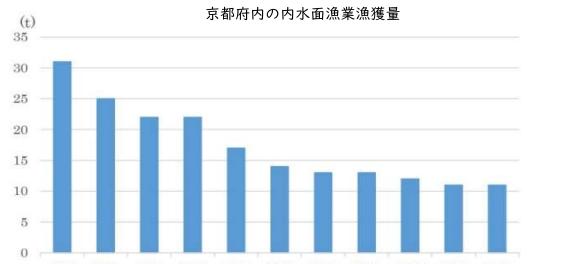
京都府下には、淀川水系と由良川水系の二大水系があり、水系によって生息する生物、漁業資源にそれぞれ特徴がある。

京都市内を流れる多くの河川が属する淀川水系の河川は、大阪府を流れ、大阪湾に流れ込む。上流はアマゴ、中流はアユ、中流から下流にはコイ、フナ、オイカワ等が生息しており、漁業資源として利用されている。また、アユモドキやイタセンパラ等の絶滅危惧種や、琵琶湖水系固有種が生息し、生物多様性が高いのが特徴である。

分布量の推移

内水面漁業漁獲量※（販売を目的として漁獲された量で、遊漁による採捕量は含まない）は、10年前と比べて約35%となっており、著しく減少している。減少の原因は、カワウや外来魚による食害、漁場環境の悪化、高齢化や過疎化による漁業者の減少等が考えられる。

※ 内水面漁業漁獲量：河川・池・沼の淡水における漁業



出典：京都府（2021）京都府内水面漁業振興計画

生息環境等の変化

淡水魚は海水魚と同様、古来より重要な食糧資源として利用されてきたが、近年、多くの種が減少傾向にあり、その原因は、護岸工事や川の直線化、池や水路の埋め立てによる生息環境の悪化と消失である。また、小魚を主な餌とするオオクチバスやコクチバス、ブルーギルといった外来魚が増えたことも、淡水魚の減少に拍車をかけている。

また、季節的に大きく変動があるが、京都府には300羽から1,000羽程度のカワウが生息している。カワウは魚食性の鳥で、1990年代から全国的に生息数が急増したことで内水面漁業に甚大な影響を与えている。



出典：京都府（2021）京都府内水面漁業振興計画

減少理由と課題の整理

気象害

カワウの増加による食害。

獣害

漁業従事者の減少。

担い手（管理）不足

外来種増加による生息環境の悪化。

外来種

河川改修工事等による生息環境の悪化。

都市化

指標種：アユ

ハビタット：水辺



① 川魚料理等との関わりが深く、京都らしい食文化の伝統を継承していくには必要な生物資源。

② 市内の水環境で採れる川魚は古くから市民の郷土料理として親しまれてきた。

③ 河川改修工事等により、アユ等が遡上しにくい環境となっており、生息環境が悪化している。

